

「特定研究」復活への提言

安田 淳子

Suggestion on Revival of Specific Study Program

Junko YASUDA

保育士養成課程の変更に伴い、平成23年度より本学では総合演習科目「保育総合ゼミ」に代わり「保育・教職実践演習」が導入された。

全保育科専任教員で担当していた「保育総合ゼミ」は、前身校駒沢学園高等保育学校における「保育研究」、および本学の建学の精神を基盤とした学生の自主研究「特定研究」を継承するものであった。「保育総合ゼミ」の廃止により、本学の誇るべき伝統、特色の一つである、学生の自主研究の機会が失われてしまったのではないかと懸念を持つようになった。

本論では、「特定研究」の歴史的経緯を踏まえ特に短大創設期の関係資料を提供し、「特定研究」復活への提言を目的とする。

キーワード: 大学の使命、建学の精神、学生の自主的研究、特定研究

I はじめに

「なぜ、ゼミをやめてしまったのか？」

この2年間、学内の教職員や学生、卒業生や退職した教員、また受験生や一般の方からも問いかけられることがあったが、残念ながら、きちんと答えられなかった。もやもやとした気持ちが払拭できないまま、罪悪感のような意識がますます大きくなってきている。

なぜ、あの時、本学の建学の精神を基盤とした伝統的な教育活動である「学生の自主研究」の機会を学生から奪い、本学教員としての使命を放棄することになることに思いをいたし科会でじっくりと話し合わなかったか。一瞬よぎった違和感、疑問について訴え続けなかったのか。昭和43年より長く本学の教育に携わってきた筆者の後悔や謝罪の気持ち、何とかしなくてはという危機感、今ならまだ間に合うかという焦燥感に突き動かされ、「学生の自主研究」(特定研究)についての自説を明らかにするとともに、提言を通して現教員との意識の共有化をめざし、本稿にとり組むこととした。

本学における「特定研究」については、その概要や意義等について、昭和62年10月発行『駒沢学園六十周年史』(第一編 学園教育の現況 第十章 短大の教育・研究 第一節 短大 特定研究)において、ま

た、校友会誌平成2年度『無憂華』第28号の特集「二十一世紀の駒沢学園の教育を展望する(3) — 保育科 —」における「自ら学ぶ意欲と姿勢 — 特定研究 —」ですでにまとめている。そこで本稿では、歴史的経緯を踏まえて特に短大創設期の関係資料の提供を目的とし、および考察を行うこととする。

II 方法

方法については、筆者の専門は音楽演奏であり、演奏指導法であることから、本来は、聴くことを目的に集まった聴衆を前にして演奏発表(音楽作品の再現)を行い、同じ時、同じ空間、同じ空気を共有することにある。その発表方法によることとしたい。

すなわち、筆者によるレクチャーつき誌上発表会「特定研究」である。特定研究に関わられた先生方の残された文章(できる限り全文)の再現を通して、そこから先生方の思いや心を届け、また筆者が感動し、共感し、伝えたい何かを感じていただけたらという気持ちをこめて。

さて、以下は、昭和56年3月復刊の駒沢女子短期大学『保育研究』第4号で当時教務学監であった見理文周先生の「復刊継続するにあたって」である。今回資料を読み返す過程でこの文章に出合ったときには、

『保育研究』を「特定研究」に置き換えると、現在の筆者の心情に非常に近いものであり、心に響くものであった。ここに紹介する。

「到来した郵便物の中に、他の短大の学生論文集を見るたびに、いつもひそかに、良心の仮借のようなものを感じてきた。私が教務課長に就任した年からだから、もう十一年になる。

十年以上も見過ごした私の責任が問われるかもしれない。せっかく「特定研究」という結構な慣例があるのだから、その成果を記録して残すことは極めて当然のことなのである。それを、なぜしなかったのか。出来なかったのか。

言訳がましくなるが、少くとも私の怠慢のせいではなかった。その時の財政上の都合から、出版を少し見合わせて、原稿のまま保管しよう、都合がいたら印刷すればいい、ということだったのが、そのまま受継がれてしまったのである。そのために、原稿用紙と表紙の体裁を考えて、いくどか改定をこころみたりもしてきた。

また、近年一部の先生や学生の中から、復刊を希望する声もあったが、原稿の点検や選択と校正の問題をめぐって、反対論や慎重論が出たりして、実現できずにいた。

昭和四十二年三月に第一号が出版され、第三号で中断されていた『保育研究』が、今度また復刊継続されることになったのは、いろんな意味で大変喜ばしい。永い間、胸中にわだかまっていたものが解消し、肩の荷がおりた気がする。

研究は学生の本分であるから、いまさら、その重要性について述べることもあるまい。発表者はここに採録された研究成果を土台とし、初心と姿勢を失わずに、さらに努力を積み重ねて、それが生涯学習につながる契機になればいいのだが、と念じている。

百尺竿頭一歩を進められんことを一。」(全文)

Ⅲ 本学教育の伝統的特色である「特定研究」

小川弘貫学長は、昭和41年度保育科第一回卒業生による特定研究発表会全体会議での学長挨拶において、学生に次のような話をされている。『保育研究』第1号「研究に意欲を」においてその内容の記述があるが、ここから、本学における特定研究のすべて、歴史が始まっているのである。ここに紹介する。

「昨年までは各種学校で湯本先生のご指導でごく小範囲に限られて第九回まで研究発表をいたしました。本年か

らはこれを広げて先生方をお願いしてやることになりました。

ご承知の通り大学生活は研究生活であります。研究生活の指導者になって頂いた先生との関係、次に、友人、学友、人間関係と研究の成果、即ち教授と学友と研究成果の三つ、これが大学生活にのこるものであります。二年の生活はこれを経験してきました。一年はまだこれからであります。大学生活の卒業論文のかわりであります。私は分科会の会場を時間や場所の都合で、あっちこっちかけ廻りました。午前中に三会場、午後は二会場、午前午後通じて大体八発表は見ました。三分の二は直接見たり聞くことが出来ました。質疑応答も活発に出来ましたし、先生方がどンドン質問もされました。全体の発表会の盛り上がりがありました。時間をかけぬ割合によくやったと思います。書いたものよりも皆さんが実際捉えたものを資料としてこれに指導の先生より助言を頂いて発表したことも又非常によかったと思うのであります。しかし、まだその研究の内容が浅いということも感じたのであります。

いつも申しますように、毎日の記録をとるようにして、これを積み重ねて行くなれば、きっと立派なデータが生まれて来ます。一つのことでも、二つのことでも永続してやる、教育を実際にやってみるところに立派なものが出るのであります。この点について、本日の研究発表はそれを熱心にやったということ私は認めます。

最後に、礼儀作法のことについて申しますが、司会のことについても、司会のやり方にしても、或は、ベルの鳴らし方にしても、無礼にならぬように気をつけてやって頂きたいのであります。」(全文)

小川弘貫学長は、昭和9年駒沢高等女学校教諭に就任以来、駒沢大学および駒沢学園での教育に深く携わり、29年駒沢大学教授、32年駒沢学園理事長ならびに学園長に就任。この間山上曹源学園長(初代、第三代校長)のもと幼稚園(昭和25年開園)、高等保育学校(28年開校)、高等保母学校(32年開校)の開設を経て、上田祖峯学監と共に昭和40年4月駒沢女子短期大学を創設しその学長に就任された。なお、昭和36年には駒沢大学より博士号を授与されている。

学生には、日頃から毎週講堂での月曜朝礼(正念)で親しく接し、大学における学問と学生生活について「目的を持って大学に入り、よき師を得て、よい友を持ち、学問をすること。学習生活の記念として特定研究の機会を活かされたい」との趣旨の話をされていた。そのお気持ちの深さは入学試験の時、受験生全員に学長面接を行

いわずかな時間でも直接会話することを大事にされていたことにも現れていた。

礼儀作法には厳しくその威厳と風格から威圧感が漂っていたが、柔和で優しいお人柄の先生は、誰もが敬愛する学園の象徴的存在であられた。しかし、昭和49年4月10日短期大学入学式において、保育科第十回入学生486名、食物科第九回入学生164名にむけての学長式辞の終わりに近づいたとき言葉が途絶えあまりにも突然と、立亡遷化された。筆者も壇上の一人として伺った先生の最後の言葉は、「大学というところは高等学校と違って、専ら学問を研究するところでありませぬ。思想活動や政治活動をするところではありません。そして、その中に自分自身の生き方を身につけてゆかねばならないのです。これを忘れてはなりません。」(『駒沢学園六十周年史』493頁より)であった。

因みに、昭和41年10月に落成をみた大講堂について先生は、「新講堂は本学園の精神教育の核心である。」「学園のもの一同にとつて尊い道場である。この道場で我々は正念をしたり、尊い行事を行ったりして、自己の人間像をうまずたゆまず彫刻して行かなければならぬ。」「この講堂を大事にして、しかも大いに使って、皆で教育の成果を、自教育他教育の成果をあげるよう努力して行きましょう」(『駒沢学園六十周年史』479頁より／『りんどう』第七号)と語られ、範をしめされていた。

初めての特定研究発表会

さて、昭和41年度保育科第1回卒業生による特定研究発表会であるが、昭和41年12月8日(木)成道会の式典に引き続き開催された。以下に発表会プログラムを掲載する。

昭和41年度 第1回卒業生研究発表会

駒沢女子短期大学

1. 日 時 12月8日(木) A.M 10.30 ~ P.M 16.00

2. 発表者 保育科2年生全員

3. 参加者 保育科、食物科学生全員

4. 発表要領 第1. 2. 3分科会に分れて発表する

A.M 10.30 ~ 12.00

中 食

P.M 1.00 ~ 2.30

① 第1分科会 (第1合同講義室)

指導助言者 長尾先生、中野先生、石渡先生

△ 9論題について発表

② 第2分科会 (保育科2年美、善教室)

指導助言者 山内先生、賀来先生

△ 8論題について発表

③ 第3分科会 (第3合同講義室)

指導助言者 野崎先生、浜本先生、天野先生、湯本先生

△ 8論題について発表

④ 発表時間 15分 質問 5分

(各論題につき20分)

5. 全体会議 (大講堂) P.M 3.00 ~ 4.00

各分科会 発表

1. 指導助言者 教員名

2. 司会者 学生氏名

3. 論題 及び 発表者

論題名、発表者名、指導教員名

(筆者注：わら半紙1枚二つ折り4頁からなるプログラムの見開き2頁にわたり、各分科会(発表会場)別に記載されているが、紙面の関係で省略する。ただし、教員別論題数および学生数は次の通りである。長尾先生：7論題(学生数22名) 中野先生：1(2) 石渡先生：1(1) 山内先生：7(18) 賀来先生：1(4) 天野、湯本先生：4(10) 浜本先生：2(7) 野崎先生：2(7))

全体会議 (大講堂)

1. 開 会 司会 岡部先生

2. 学長先生 挨拶

3. 分科会報告

① 第1分科会 学生司会者 M

② 第2分科会 学生司会者 K

③ 第3分科会 学生司会者 A

4. 質 疑 応 答

5. 講 評

① 第1分科会 長尾先生

② 第2分科会 山内先生

③ 第3分科会 野崎先生

6. 保育学科長 挨拶 稲垣先生

7. 閉 会

当日の様子は、さながら学会発表会の体をなし活況にみちていたのではなかったか、昭和43年度第3回発表会以来実際に見たり聞いたり、その場にいた経験から

想像にかたくな。学生ばかりではなく、教員や関係者にとっても大学における初めての学生による研究発表会である。一部教員に保育学校時代の経験があるとはいえ、規模も施設も変わっている。全体に緊張感にあふれ、不安や期待感、達成感や反省などさまざまな感情が交錯していたと思われる。

各分科会の講評は『保育研究』第一号に掲載されているので詳細はそちらに譲るが、いずれも研究方法や発表の仕方などに具体的な指摘や助言を、そして学生への敬意と激励を、また教員自身の反省点にも触れている。また、特定研究の全容については、同誌の岡部禪竜 教務課長「研究活動を眺めて」によって知ることが出来る。以下に紹介することとする。

「昭和四十年年度保育科入学七十一名の学生諸君が、一年間の教育を終り、二年生になった六月下旬、各自の希望する分野に向って研究活動を進めるべく、グループによる研究、個人の単独研究等二十五の研究課題を決定して研究活動に入った。

七月に入れば、この研究とは別に幼稚園の教育実習がはじまり、児童文化班等は地方巡回の旅に出発する等、学生は忙しい忙しさの中で夏休みに入る。夏休み終了後、九月下旬前期試験の開始、十月、十一月は、音楽リズム発表会、大講堂落慶式、学園祭、体育祭等、実習や行事が多く時間的余裕が非常に少い中で、十二月八日発表会となった。この間六ヶ月、私自身正直に言って余程努力して時間を探し、余暇を充分に利用しないと研究の成果を期待することは無理だろうと思っていた。

こんな状態の中で、九月中旬から十月に入って、各方面の各種施設に資料を集めるため、或いは、直接指導を受けるための相談を毎日のように教務課にもちこんで来る。各グループの活動が活発になる、それも授業終了後、或いは、土曜日の午後、日曜等を利用している。こんな熱心なグループがいくつかあった。

いよいよ発表の二日程前から、グラフ、図表等の製作で教室に電灯を点じての夜間作業が続く。

当日は各分科会とも学生の司会により、三つの分科会に分れて一課題十五分の発表で開始、午前十時の開会より、四時の全体会議終了まで熱心な発表と、質問が行われる。グループによっては、貴重な資料、データーを集めて発表していた。

発表の技術、グラフ、図表等の適切な使用等については相当の問題が残されているようであるが、概して、発

表会は好成績で終了したとの講評を得た事は、私自身とでもうれしかった。

勿論、保育の専門的な各分野における研究成果の理想とするところは、決して簡単なものではなく、個々の問題について細かい批評が下されるとすれば、問題は多いと思うが、

本年度の発表会で感じた事は、

第一に学生諸君に研究活動と取り組んでいた、あの前向きで熱心な姿勢と真剣な態度は高く評価してよいと思うし、

第二には、八・九・十月と炎暑の中で各自汗を流し乍ら各地の機関、施設等に自分の足を運んで、直接問題にぶつかり調査し、或は自らの目で確認して持ち帰った生の資料、データーは、たとえ、それが、既に他の人によって調査、集計発表済みのものであっても、自分達の手によって、改めて集計調査、研究発表が出来たということが大きな喜びであり、将来有形、無形の自信となって成果を産むものと思う。」(全文)

当時から保育科の学生が忙しいことには変わりはないが、現在の年間スケジュールとで大きな違いもある。前期は4月10日入学式、7月実習、夏休みを挟んで9月1日講義再開、中頃から前期試験、下旬には学園祭、永平寺旅行等の行事があり、その後10月初旬に後期講義開始、12月21日冬期休業、1月11日講義開始、1月26日音楽リズム発表会、2月2週日二年生卒業試験(3週日一年生後期試験)、下旬追再試験、3月3日(月)判定会、3月7日(金)卒業式である。

ここに、特定研究のスケジュールが加わる。年度当初教務課長より特定研究についての説明、5月中旬 特定研究テーマメ切、テーマ等の調整後6月以降研究開始(個人、各グループで活動)、12月8日 特定研究発表会、12月20日特定研究論文の提出、翌42年3月『保育研究』第1号 発刊である。

『保育研究』第一号

第一回特定研究で発表した学生研究の成果を集録した論集である。

保育科第1回卒業生71名による25論題および保育学校卒業生2名による1論題、昭和40年度保育学校卒業生3名による1論題 が194頁にわたり集録されている。巻頭には、「研究に意欲を」(小川弘貫学長)をはじめ、8頁にわたり「『保育研究』の発刊に想う」(稲

垣清二郎保育学科長)、「研究活動を眺めて」(岡部禅龍教務課長)、「第一分科会に望んで」(長尾章象先生)、「第二分科会に望んで」(山内昭道先生)、「第三分科会に望んで」(野崎信洋先生)が寄せられている。

『保育研究』は、保育学校時代にすでに刊行されていて、短期大学もそれを継承した。途中中断を余儀なくされた時期があったが、平成13年度に『保育総合ゼミ論集』に生まれ変わるまで、伝統を築くこととなる。この経緯等については、『保育研究』第24号「伝統ある学生研究論文集」において、当時の保育科長 天野珠子先生が披露している。

さて、『保育研究』第一号の収録論文は、下記のような「特定研究執筆要項」にしたがって執筆されている。(配布プリント、かなづかいが原文による)

1. 原稿用紙は400字詰、B4のものを使用する
2. 表紙は白色厚紙(画用紙程度)を使用し、論文題名、科、年、組、番号、氏名、指導教官名を明記すること。
3. 原稿枚数は、400字詰30枚(多少の増減はよい)
4. 内容に応じて縦書又は横書とする。(たとえば、自然科学関係のものは横書きがよい。)
5. 執筆は次の要領による。
 - ①文章は平易な口語文とし、必ずペン書とする。(…である。…となった。…であろう。)
 - ②原則として、新かなづかい、当用漢字を用いる。ただし、固有名詞や学術用語はその限りではない。
 - ③文中で記す書名は『 』。引用文は「 」をそれぞれつける。
 - ④文章の最初と段落(200字位を基準とするのが好ましい)は必ず一字下げ、句読点および、カッコは一字に数える。
 - ⑤原則として、章、節、を立て文意を整理して記すようにする。また内容によっては、たとえば、目的、方法、結果、考察、要約のようにわけて記載するのがよい。
 - ⑥参考文献は、論文末尾に記載する。
 - ⑦図(写真を含む)表には、第○図、第○表のように、それぞれ一連番号をつける。

因みに、『保育研究』第一号は縦書きの冊子である。

ところで、第1回特定研究に関する資料で手元にあるのは、『保育研究』第一号のほかには、わら半紙1枚二つ折り4頁の発表会プログラムと特定研究執筆要項のプリント1枚だけである。いずれもその後の特定研究の基礎資料となるものであることから、掲載した。

IV 特定研究の歴史的経過とその意義

昭和42年度の特定研究は、新たに食物科第1回卒業生が発表者に加わって、規模が大きくなり、発表は第1～第6分科会開催となった。保育科では、第1,2(以上 合同講義室)、第4,5,6(以上 普通講義室)の5会場で行われた。講堂での全体会議終了まで、発表会スケジュールや発表方法等は前年度を踏襲しているが、発表者が多くなったため発表時間は5分短縮されている。

この年には、特定研究発表会論題概要が冊子となり、発表会について(10頁)、保育科75論題(232名,69頁)、食物科24論題(15頁)の発表要旨が掲載されている。教員別論題数および学生数は次の通りであるが、研究分野が保育内容のあらゆる分野へと拡大している。石渡:1論題(学生数2名) 葛西:1(3) 稲垣:1(2) 湯本:1(1) 湯本、天野:1(1) 湯本、阿久津:1(4) 野崎:9(27) 藤田:1(2) 天野:16(46) 太田:1(2) 古野:4(15) 長尾:9(26) 山内:21(79) 玉水:8(22)(敬称略)。

発表会後に提出された論文(71論題)については、『保育研究』第2号にまとめられたが、冊子は横書き、361頁にもおよぶ膨大な論集になった。

そこで、次年度には、『保育研究』について、急激に増加した学生数、論題数に対応すべく方法が検討された。集録する論文に制限を設け、各指導担当教員が指導論題数の半数を基準に、指導した論文の中から選択収録する(論文枚数も約半数に減)。収録対象にならなかった原稿については、論題、研究の目的、方法、結果(原稿用紙1枚)、学生氏名を収録。巻末に論題一覧を付記することになった。

昭和43年度には、2年生278名が指導教授のもとで特定研究を行い、12月7日(土)の発表会を経て、103論題を紙上発表論文42論題(7—269頁)、論文要旨のみ40論題(270—286頁)、論題一覧(287—290頁)を収録、『保育研究』第3号としてまとめられた。この『保育研究』は、学生には原則として申込者に実費販売されることから、12月中旬に学生(1,2年生)の予約申し込みの状況により、発行部数を決定していた。

教員別論題数および学生数は次の通りである。天野、湯本:23論題(学生数63名) 長尾:21(63) 山内:15(42) 野崎:9(27) 玉水:8(19) 村上:7(14) 古野、石渡:6(16) 藤田:3(7) 浅野:3(11) 稲垣:3(8) 上田:2(5) 太田:2(2) 徳永:1(1)(敬称略)

短大創設時の指導者には、保育学校時代に教員で

あった方たちも多くみられる。中でも、石渡、湯本の両先生は、各種学校の監督指導の立場で東京学芸大学からこられていたが、短大になってからも非常勤講師として長くお世話になっている。

以上ここまで、短大創設時から3年間の推移について述べてきたが、この特定研究は、昭和44年度以降も平成12年度まで一度も途切れることなく毎年行なわれ、本学の自主研究の伝統を受け継いでいる。

学生の自主研究ではあるが、スタート時の全員参加からその後もごく少数をのぞく大部分の学生が参加し、内容の充実などますます発展の道を歩み始めたかのように思われたが、参加率は徐々に減少する傾向をしめした。この時期は、学園の諸事情や保育科の学生数増加（開学以来、保育科は目覚ましい発展をたどり、昭和45年度からの15年間は、入学生が初年度の5倍を超えていた）に伴う教員増、施設・設備拡充や整備など、経済的に困難な時代で、『保育研究』の休刊（44年度より）、発表会冊子の休止（49年度より、プリントに変更）などを余儀なくされていた。

こうした傾向に対して、昭和49年度には研究分野を実技系部門（実演、演奏、作品制作など）へ拡大し、また論述部門での啓蒙など、特定研究委員会を中心に教員一丸となってさまざまな検討、工夫を重ねた。その結果、54年度の論題数14（論述7・実技系7）、参加学生数32名・参加率8パーセントの最大の危機を乗り越え、55年度に35パーセントを確保、その後は順調に推移し、60年度には半数を超える学生が参加するまでに回復、62年度には80パーセントを超える学生が参加、研究に取り組んでいる。（筆者注：この部分については、筆者の「特定研究」（『駒沢学園60周年史』186-188頁に詳細を記載しているので参照されたい。）

この頃には、食物科との合同開催から科別の発表会へと移り、保育科では、講堂に全員が集まり午前中に論述、午後の実演・実技および講評を。また別会場において作品の展示（終日）へと変化をみせている。また論題数の復活、実技発表の増加に伴い57年度からは2日間連続開催（62年度まで）で行われている。

学園が稲城に移転した平成元年度以降については、『発表会冊子』、『保育研究』とあわせて特定研究委員会の記録がファイルとして保存されるようになり、資料が整備されている。また、現教員の中で実際に指導者としての経験者もいることから詳細については本稿では省

略することとするが、世田谷時代とは、環境面で施設・設備・発表機器等に雲泥の差が見られる。そして何よりも入学生数が徐々に120名前後に安定し、平成6年度以降は参加率が90パーセント台で推移している。この参加率の高さが「保育総合ゼミ」への移行を円滑にした一因であったと考えられる。

建学の精神と学生にとっての特定研究

上田租峯先生は、昭和49年小川学長の急逝により学園長に就任、駒沢女子短期大学学長に就任された。昭和28年学校法人・駒沢学園副学監、中高教諭、高等保育学校幹事に就任以来、高等保育学校主事を経て、34年学園学監、高等保育学校専任教員に就任。その先見性と情熱、実行力を持って、昭和40年駒沢女子短期大学設立時には、小川学園長を支える中心的な役割を果たされている。

先生は、昭和28年学園就任と高等保育学校の開校がその機を一にしているところから、本学の保育者養成と共にあったともいえる。その歩みを見続けた立場から、短大保育科の特定研究について「その前身校の教育的生命を継承していること、その歴史と伝統と生き方に本学教育の特色は創立以来変わっていないこと、建学の精神を根底にふまえて、研鑽努力によって支えてきた教授陣と学生たちの功績である」（『保育研究』復刊号（第4号）「巻頭言」より）との評価をしている。

発表会の時には直接に、また昭和56年3月復刊の『保育研究』第4号から退職される平成6年3月発刊の第17号まで、その巻頭言において、特定研究の意義や狙い、学生へ励ましの言葉を贈っている。以下にいくつか紹介する。

「2ヶ年修業という短期大学において、規定のカリキュラム以外に、特定研究の発表を行うことは容易なことではありません。しかし、本学が、敢えて、この特定研究に取り組むように指導し、学生の自主的な理解と研鑽を要請していることには、極めて重要な意義があります。専門分野における学問技術の教育と研究をダイナミックに展開することは、大学本来の使命であります。本学に学ぶ学生はその使命と責任を自覚し、不断に研鑽努力することは当然であります。短期大学でも、大学に学ぶという意味では4年制大学とんんら異なるところはないのであります。」（第8号より）

「大学人として為すべき第一義は、申すまでもなく学問

研究であります。そのことは社会の要望でもあり、我々の責務でもあります。学生諸君にとって2年間という短い時間の中で、社会の要望に答え、責務を果たすことは非常に困難なことです。けれども長い人生を考えれば、今その姿勢を自ら大きく育成すべきなのです。

日頃の講義内容を、十分に消化していく努力はもちろん大切なことです。と同時に、講義の一部分なりをもっと深く追求してみたい、あるいは講義から派生した興味や好奇心を誘うところのものを探りたい、また技術をさらに高度に身につけたいなど学生一人一人にさまざまな思いがあることでしょう。その「思い」が学問・研究への芽であり、実際に手がけていくことが、その道への第一歩なのです。受け身でなく自分から働きかけていく姿勢が、自らを大きく育成することになるのです。

特定研究は正にそんな狙いと目的のためにあります。今年度も多くの学生が参加して立派な成果をあげられたことに大きな喜びを感じております。そしてこの経験が将来きつと生きてくると事と確信しております。

学生らしい探究心を満たすために、また、青春の中の疑問を解くために、これからも特定研究に一人でも多くの参加を期待し、活躍されることを願ってやみません。」(第17号・全文)

「『学道の人は後日をまちて行道せんと思うこと勿れ。只今日今時を過ぎずして日日時時を勤むべきなり』(『正法眼蔵聞記』)と、学人に対して実修工夫する基本的な姿勢の重要性を道元禪師は指摘されております。禪の修行生活においては、絶えず自己を内省し、実修工夫してゆくことを重視するのであります。人間形成をめざして、学術を中心として教育と研究を展開することが大学の使命であり、それぞれの専門分野の学問や技術の研究に主体性と創造性をもって積極的に取り組みその研究成果を挙げることは学生の本分であります。この研究の実修は言うに易く行うことは極めて困難や障害を伴うものであります。今日なすべきことを明日へ引き延ばそうとするのが人間の弱さであります。だからこそ日日時時を勤めて精進することを指摘されるのであります。人間がひとたび本心真心を自覚すれば、自ら目的や理想に向かっての意識が展望され、これに向かって研究してゆく勇気が湧出し、さらに百尺竿頭一步を進め、焦眉の急をもって瞬時に集中努力することが可能であります。いま、ここに、一事に全身心をつくすことが禪であり、人間の真実の生き方であり、人生において最も重要なことであります。このような生き方と努力の

中から創造性が具体的化され、すばらしい成果をもたらすことになるであります。

本学の特色である特定研究発表会がさる十二月八日九日の両日にわたって行われましたが、大変充実感を強くしました。このような自主研究が学生の資質を高め、学内研究を通してその関心や態度や方法を学ばれたことと息をいいます。

今後生涯を通して人間として、また、専門家として、一層の研鑽を期待してやみません。」(第6号・全文)

「『学道の人、たとひ悟りを得ても、今は至極と思う行道をやむることなかれ、道は無窮なり。悟りても猶行道すべし。』

道元禪師のこの教えを守って、末永く不断の研鑽を期待します。」(第14号より)

学園長、理事長(昭和62年就任)としての先生は、学園創立60周年記念事業である学園移転という世紀の一大事業を達成された。しかし、新しい学園の構想実現に向けての道半ばで病を得、平成6年3月退職を余儀なくされたことは、残念であった。

教員にとっての特定研究

太田久紀先生は、唯識論が専門であり、短大創設時からの学園生活で常に研究室の人との印象が強いが、特定研究では特定研究委員としての先生とのかかわりや、そして何よりも発表会では全発表に、会場に威儀を正して静かに座る姿がいつもあったことが忘れられない。

保育科長(昭和60年度までは保育学科長)にあったとき、『保育研究』昭和58年3月発刊第6号から平成3年3月発刊第14号で、学生に向けた科長の文章は、教員へのメッセージであり、特定研究論とも受け取ることが出来る。今改めて読むとどれも心に響く内容である。筆者が本稿の構想で一番初めにどうしても伝えたいことであった。字数の制約の中で一つひとつがあたかもエッセイとして完結しながら、全9回分が一つの作品としてまとまっているのである。音楽作品での「組曲」や「小曲集」を思い浮かべる。一つひとつに標題のついた九つの小曲からなる「特定研究」である。筆者はシューマンの「子どもの情景」に似た感慨を覚えこの小曲集を演奏したい、心を届けたいという切なる思いである。

覚えておいて欲しいこと(第6号・58年3月)

「自分の文章が、はじめて印刷されるということは、とても

うれしいものです。なにか急にえらくなったような気さえます。

おそらく、ステージで発表が無事に終わった時や、自分の精魂こめた作品が、人前に展示されて、みんながそれを見てくれ、感想を聞かせてくれる時のよろこびも同じでありましょう。

そのよろこびは、みずから一つのテーマにとりくみ、それを最後までやりとげた人のみが知るものです。素直によるこびをかみしめて下さい。生涯、諸君を支える一つの原点となるでしょう。

しかし、ちょっとそこで立ちどまってください。諸君の論文や作品や演奏が完成するについて、どれだけの人の力を得たか、それをふりかえて欲しいのです。調査やアンケートで多くの人にお世話になった諸君もありましょう。そうでない人もむろんあります。ただひとつ確実にいえることは、とにかく先生のお世話になった、これだけは諸君に共通している事実ではないかと思えます。放課後遅くまで研究室やピアノ室で指導を受けた人もあります。先生の御自宅までおしかけた人もあります。先生の御指導がなかったら、どこまで研究が進んだかわからないといえるかもしれません。そのことを心の底にうけとめておいて欲しいと思うのです。

もう一つ、諸君はおそらく気がつかぬかもしれませんが、特定研究の発表会や論文集を実現するために、委員の先生がたは、四月から、何回を何回も会議を開き、長時間、討議を重ね、いろいろな事務を処理してきておられます。直接の指導以外にも、そういう眼に見えぬお世話になっているのです。そのことも忘れないでおいて欲しいと思えます。

片隅の研究室で、諸君と先生がたの大学らしい交流を見ながら、私の思うことです。」

精神の固定化をおそれよ（第7号 59年3月）

「最もまちがっているもの、それは“これにちがいない”ということ、そのことである。信念は嘘よりも危険な真理の敵である」。これはニイチェ（1844～1900）のことばである。ニイチェはいつも激しい表現をする人であるから、この語についてもよく考えてみなければならぬ点が含まれてはいる。しかし、何かを勉強するとか、研究をするとか、創造する、演奏するなどの作業にとりくむ時には忘れてはならぬ金言だと思う。

研究・創作・演奏などの場合、私たちは、一つの先入観・思い込み・信念などという精神の停滞や固定と闘わねばならない。それを忘れた時、でき上がったものが、外見上どんなに立派であっても、それは形だけであって、真の研究でも創作でも演奏でもなくなるのだと思う。

特定研究の発表を見たり聞いたりしながら、自分からすすんで境域の固定化に挑戦している諸君の姿をかいま見る思いがして、私はうれしかった。

一つのことを勉強したり、新しいものを作ったり、先人が何回も演奏した曲を自分もまた自分の手で弾いて見たり、歌ってみたりして、はじめて、境界線が決して固定したものではなく一歩近づくごとに一歩広がるものであることを、諸君は自分の心で感じとったにちがいないと思う。

いったい私たちにどれだけのことがなし得るだろうか。真理や美の世界の深さや奥ゆきが、少しでも心に響いてきたら、それこそが、特定研究の最大の成果ではなかったであろうか。

真理や美の廣大無辺を知ることは、それにおそれなして、とどまることではない。今からまた一歩でも進むことだ。

これからも一歩一歩進むことだ。それを願ってやまない。」

一つのものを追う（第8号 60年3月）

「サッカーのペナルティキックをみると、いつも感動する。ボールを蹴る選手と、それを受けとめようとするゴールキーパーとが、1対1で向き合う。あの純粋無雑な緊張した表情や姿勢がすばらしいのである。

特定研究にとり組んでいる諸君の姿に、私はいつもそれに似た共通の姿を見る思いがして感動する。論文の勉強で夜遅くまで先生と議論をしている姿や、作品の製作に打ち込んでいる姿、胸をドキドキさせながら楽器に向っている姿、皆それぞれに全精神を集中して1つのものに立ち向かっている諸君の姿は実にすばらしい。

その時の、張りつめたあの充実感は余人のはかり知り得ぬものだろう。ただその人だけのものだ。

そうした充実感、何かを一生懸命追い求める時にのみ体験するものではないかと思う。求めるものがなかったり、追いかける気持がうすい時には、絶対に自分の中に燃えないものだ。今度特定研究にとり組んだ諸君は、きっとそれがわかるはずだ。自分から進んで選んでやりとげたさわやかな気持は、諸君のものだ。その体験を忘れないでいてほしいと思う。

人生は長いようで短い。私も年令をとって見て、そのことが実感としてわかってきた。その短い人生の中で、あれもこれもといってもそう沢山できるものではないだろう。ただ1つでよいと思う。自分にできること、自分の好きなものを探して、一生追いつづけて欲しいと思う。それが人生を充実させる1つの道だと思う。その喜びの1つの体験が特定研究であった。

ただ、1つものを追うことが、視野を固定化したり狭めたりすることであってはならぬのはいうまでもない。」

小さな発見（第9号 61年3月）

「私には、学生のころから読みつづけてきた一冊の本があります。講義を聞いたり、自分で読んだり、講義をしたりして、何回読んだかわかりません。

その本の中に、最近、新しい発見をしました。わかってみれば、さわめて平凡なことであり、文章も至って平明です。なぜ、こんな簡単なことが、何十年もわからなかったのだろうと、不思議に思うくらいです。

しかも、その本としては、とても重要な問題のところなのです。なぜ、長い間、わからなかったのか。

考えてみると、どうやら、私の中に、一つの先入観があって、それが邪魔していたようです。書かれた文章を素直に読まないで、他の人や本から教わったことを鵜のみにして、それに依存して、文章を読んでいたのです。だからわからなかったのです。

では、なぜ最近になって急にわかったのか。

はっきりこれという理由は、自分でもさだかではありませんが、その問題についての疑問を深めていたということがあるように思うのです。

なぜだろう、と思いつづけていました。

その疑問、一問題意識が、意識の中に定着していた先入観をうち破ったのではないかとひそかに考えています。

新しい発見をするという喜びは、それがどんなに小さな発見であっても、かけがえのないものです。

特定研究で、皆さんも、論文であれ製作であれ、演奏であれ、何かの発見があったのではないかと思います。

その発見の喜びを大切に抱きつづけ、また次々と新しい発見の喜びを探しつづけて下さい。」

過程の喜び（第10号 62年3月）

「特定研究が終わって、諸君はどのようなことを感じたであろうか。ある人は、一つのことをなしたげた充実感をしみじみと感じたであろうか。またある人は、研究すべき領域がますます広がって行って、自分達の知識の貧しさを自覚せざるをえないようなさびしさをかみしめたであろうか。練習をしても練習をしても、どうしても到達できないもどかしさをかみしめた人もきっとあるだろう。それぞれにそれぞれの感懐があるにちがいない。

ほくはそれを二つの面で整理してみたいとおもう。一つは完成された結果についての喜びであり、一つは完成にむけての過程で味わった喜びである。

どんなことでも一つのことを完成した喜びは大きい。たとえ不完全に終わったとしても、自分が一生懸命努力してまとも

あげたという喜びは、他の人にははかりしることのできぬものである。だが結果というものは、いつも充分満足のいくものばかりとはいえない。最初予想していたのはまったく違った結果がでてしまうこともあるし、演奏の場合などみじめな結果におわってしまうこともある。それはそれで仕方のないことだとおもう。良き結果を生むためには、またあらためて新しく再出発するしかない。

そこで、ほくは、特定研究で学ぶべき大切なことの第一は過程の喜びを知ることだと思っている。研究でも創作でも演奏でも、一つの目標にむかって、一步一步作りあげたり深めたり広げたりしていくそのこと自体のなかに、物事を成し遂げる深い喜びがある。そこに喜びや楽しみを見出すことだ。むろん過程のなかには、失敗もあるし過ちをおかすこともある。しかしその試行錯誤のなかに一つ一つ探りだし作りあげていく喜びがあるものだ。自分で目標をえらび、自分からそれにぶつかっていく特定研究から学ぶべき大切な一面がそのことだと思っている。

発表会も終わったし論文も完成した。しかしそれで特定研究の全て終わったのではない。今日からまた新しく過程の喜びをおいもとめていく生活が始められなければならないのだと思う。

過程の喜びを知る未来を祈ってやまない。」

自然・持続のこと（第11号 63年3月）

「久しぶりに、本居宣長の『うひ山ふみ』をひろげてみた。宣長は、江戸時代最高の研究者といってよい人である。『うひ山ふみ』は、学問・研究についての随筆集で、岩波文庫、59頁の小さな本にすぎないが、さすがは宣長、素晴らしい学問論である。

その中の二つについて紹介しておこう。

第一は、研究分野を決めるには、その人が興味関心をもつものを選ぶのがよい、無理をしたり、押しつけたりしてもうまくいかないということである。倫理的価値観や固定観念で、ものを見ることを非常に嫌い、自然の情感を尊重した宣長らしい感想である。

特定研究の発表をききながら感じるのには、それぞれの人が、それぞれのテーマを選んでとりくんでいる姿の素晴らしさである。論文研究に挑戦する人、作品製作にうちこむ人、演奏に全力をそそぐ人、さまざまである。僕のように、教室で半年ばかり顔をみただけの人間には、とても想像することのできぬような諸君の一面にふれて、感動することがしばしばである。あの人があんな才能をもっていたのかと驚く。人を、ある特定の角度からだけみて評価することの危険をつくづく思う。

第二は、持続することの重要性があげられている。勉強の仕方や研究の方法は、それほど重要ではない。大切なことは、ただ年月長く、うまずおこたらずつづけることだということである。特定研究にとりくんだ諸君は、正味7カ月くらいだろうか、一つのテーマにとりくんできた。時間がかさなるにつれて、諸君がぐんぐん伸びていくようすが、われわれ教師の眼にみえてくる。はじめは、いったいどうなるのだろうかと心配した人たちもないわけではないが、その人たちが、だんだんと整って、きちんと進みはじめるのをみている時、持続の素晴らしさを痛感する。

自然の態度、持続の成果は、学問研究にとって大切な指摘であることはもちろんのことであるが、それだけではなく、もっと広く人生全般にもあてはまるように思う。

それぞれの人にそれぞれの人生がある。無理のない態度で、自分の人生を探しだし、持続してそれをつくりあげていかなければならないのだと思う。」

限りないもの（第12号 平成元年3月）

「研究・学問などと呼ぶほどの勉強はしたことがない。私が今日までたどってきた道を振り返ってみると、それほど大部とはいえない漢文の一冊の古典を、くりかえし読んできたというだけのことであったように思う。

それも、その研究によって、新しい学的業績をあげるといようなはなばなしい能力はないから、その本のなかから、さまざまな人生の考えるべき問題や、人間の機微を教わり、それによって、少しでも自分の精神を豊かにすることを願いながら、いつしかこの年齢になってしまったというのが、偽らざる自分の姿であるように思う。

それも生来のなまけものだから、熱心に集中して一生懸命勉強してきたとはいえない。

四十年も同じものを開いたり閉じたりしていると、初めは、それほど好きでもなかったその本も、だんだん情が移っていくものである。なにかを考えると、無意識裡にまず頭に浮かんでくるのは、その本のどこかで出会ったテーマである。

今日まで何回読みかえたか。そう度々くりかえしたわけではないが、読む度に、何かしら新しい風景や視覚に出会う。もと見えていた景色が消えていてあわてることもある。

著書は6世紀の人である。三十二歳で亡くなった。私の今の年齢からすると子どもである。子どものような著者から、この年齢になっても、限りなく人生の奥義を教わるのである。

あと何回、ページをめくり、若い著者と対話ができるであろうか。

その度に、どんな新しい風景が見えてきたり、消え去って

いくことであろうか。楽しみでもあるが、なんだ、それだけしか見えないのかと、子どものような著者から笑われるかもしれない。それを思うとこわくもある。」

知的興味・知的関心（第13号 2年3月）

「今年の特定期研究は、参加をする諸君が多かった。完成までこぎつけられなかった人たちもなかったわけではないが、最初は100%近い参加率であった。近年の最高である。短大発足当時は、毎年それが当たり前であったが、一時は、かなり参加率が低下し、自主参加ということに疑問が持たれ、必修単位にしたかどうかという議論もあった。

しかし結局学校では、自主参加を変えなかった。いまそれでよかったのだと思う。

私は、「大学生活のきわめて根本的な問題に、知的興味あるいは知的関心を身につけることがあると思っている。極端な言い方をすれば、大学で学ぶことは、それだけでよいとさえ思う。

なにをどれだけ記憶したか、どんな技術をどこまで習得したかなどということも、もちろん大切なことだが、それは、在学中の一年や二年で完結するようなものではない。学ぶべきことは無限である。

大切なことは、未知のものに、内側から、疑問を投げかけ、それを明らかにしようと挑戦する知的関心・知的興味だと思う。

それは決して理論分野だけのことではない。創作したり実演したり演奏したりするものも、基本の精神は、少しも変わらない。

高い参加率は、諸君の内側に燃える知的興味・知的関心の強さを語るものだと思う。

研究が終わって、いま諸君はなにを感じ、なにを考えているのだろうか。

時とともに、何事に対しても興味や関心が薄くなることもあるかもしれない。大人になるということは、そういう一面が含まれていることもある。

そんな時、未知のものに挑戦したこの半年の学生生活を思い出すことだ。きっと諸君の胸の中に、知的興味・知的関心が蘇ってくるに違いない。」

感動（第14号 3年3月）

「近頃、若い人たちが無気力・無感動だといわれる。当然諸君も、そのなかに含まれるのであろう。だが私は保育科の諸君は、そうだとは思わない。無気力・無感動では、保育科の勉強などできないからだ。実習が終わる度に、諸君は子どもたちや先輩の先生から、とても多くのものを学んで

帰ってくる。無感動でない証拠である。

特研発表会の時も、痛切にそれを実感する。入学後、二年もたたないで、諸君は見違えるほどに大きくなっている。創作作品やステージでの発表をみながら、つくづくと思う。人は、変わる時には、こんな短い時間のなかで、こんなにも変わるものなのかと驚嘆する。そしてその変わることの根源にあるものは、感動だと私は思っている。感動だけが人生を創造すると思う。

私自身の経験をふりかえってみると、自分の人生を形成し豊かにしているのは、なんらかの形で感動をもった経験だけだといってもよいように思う。なんにも感動しなかった経験は、つるりと滑って消えていってしまっている。つるりと滑っていったものは、私の人格形成になんの痕跡も残さない。たとえ残したとしても、少なくとも現在の私の人格性の主軸ではない。長所も短所も、私が積み重ねてきた感動の集積のように思う。どきどきしながら見たり聞いたりした感動や、心に刻みこむような感激をもちながら読んだ読書の経験や、心をときめかしながらの人とのお出合いの感動など、あれやこれやの無数の感動が、今日の私のすべてだといってよい。

ほっといても感動がもてるようになるものなのかどうか、そのへんのことは詳しくは私には解らないが、経験からいえば、すてきなものに出会ったら感動してやろうと思っていると、一日に一つや二つは出会うことができるようになる。なんでもよい。花でも雲でも、テレビでも本でも、友だちでもゆきずりの人の姿からでもよい。感動を探していると見つかるのである。

感動のある人生、味わいのある人生、それを私は、諸君に歩いてほしい。」

V 「保育総合ゼミ」から「保育・教職実践演習」へ

平成13年度より、「特定研究」が形を変え「保育総合ゼミ」として開講することになった。その経緯について、『「保育総合ゼミ論集（第6号）」の発刊によせて』において、就任2年目の福川須美 保育科長は次のように説明している。

「「保育総合ゼミ」を開講して6年が経ちました。保育科ではかつて「特定研究」という学生が自主的に取り組む自由な卒業研究を実施していました。履修単位に組み込まれていないという特殊な存在でしたが、毎年学生たちも教員も熱心に取り組む、学生時代の楽しさも苦労した思い出になっていました。しかし保育者養成課程の改定により「総合演習」が必修科目として設定されたことを受けて、自主的で自由な特定研究は全員必修の科目に変身せざるを得なくなりました。

「総合演習」は幼稚園教諭免許や保育士資格取得のための必須科目であり、全員が履修することになったわけです。その内容は保育者養成校によって様々ですが、本保育科では特定研究の伝統を生かして、学生が自主的に学習するゼミナール形式の「保育総合ゼミ」を設定しました。」（『保育総合ゼミ論集』第6号より）

この時点では、学生の主体的学習が言われて久しい時期でもあり、「保育総合ゼミ」は、本学の前進校時代の保育内容を主とした「保育研究」を受け継ぎ、「特定研究」として昭和41年度 保育科第一回卒業生によって自主研究がスタートして以来、一度も途切れることなく2年生から1年生へ、教員から教員へと積み上げてきたものを継承しているという認識は保育科教員の共有するものであったといえる。免許必修科目として形を変えても、学生および教員の全員参加が実現することや、内容が保育研究への原点回帰という発展的な期待をこめてはいたが、伝統的教育の特色である特定研究を放棄するとは思っていなかったはずである。

ところが、「保育総合ゼミ」から「保育・教職実践演習」へと変更の時には、次のような簡単な説明だけで終わっているのである。

「実は、平成23年度からは保育士養成課程が変更になり、この「保育総合ゼミ」はなくなり、「保育・教職実践演習」という新しい教科目になります。したがってこの論集は最終号となりました。」（『「保育総合ゼミ論集（第10号）」論集の発刊によせて 福川須美 保育科長』より）

筆者はそれでよいのかという気持ちを払拭できないが、福川科長は、また、前出『ゼミ論集』第6号の文章の後段で次のようにも言っている。

「ところで、情報化社会の現在では、インターネットを開ければ何の苦労もなくたくさんの情報を入手することができます。上手に切り貼りすれば・・・盗作に近い危ういレポートが出来上がってしまいます。そんな風に形だけ整える楽なことばかりしては、子どもたちに「生きる力」（筆者注：幼稚園教育要領および保育所保育指針の中心テーマであり、本学保育総合ゼミ研究の総合テーマ）を育むことのできる保育者には到底なれないでしょう。6年間を振り返って、時代の変化も考えながら、「保育総合ゼミ」のあり方を再検討する必要性を感じています」

この認識が根底にあっての決断であったかと思われるのだからいかがであろうか。

いずれにしても、このときに本学教員として受け継ぐべき、

本学が誇るべき開学以来の伝統的特色である学生の自主的研究（特定研究）の灯は消えたのである。

VI まとめ

これまでに、どれだけの人が、特定研究に関わってきたであろうか。その存在すら知らずに卒業した学生も中にはあったかもしれない。また、研究に参加せず友人の発表会での姿や創作作品を目にしたとき、羨望と後悔との複雑な感情を覚えた学生もいたであろう。そして、学生運営委員として裏方に徹した人たちも大勢いた。それらの学生の思いも含めて、本学の特定研究は、伝統を受け継いできたのである。今改めて、いろいろな思いが去来する。

筆者にとって、特定研究は本学教員生活の多くを占め、自身を成長させることの出来た貴重な体験であった。教員生活の当初から特定研究を見聞きし、実際の指導にあたっている。また、特定研究委員としてもさまざまな経験を重ねてきた。特に、昭和49年度には、音楽や児童文化関係などでの実技発表や造形での作品制作など、研究分野の拡大を提言、実現させた。演奏部門ではさまざまな学生に出会い、その能力や感性、可能性を見極め、それぞれの学生がいちばん輝く表現方法を引き出すことでの指導者冥利に尽きる体験や、あたらしい楽器ハンドベルとの出会い、発表会のプロデュースの経験など。学生に気付かされ、鍛えられた結果、自身のその後の活動へと繋がって行った。何よりも学生の真摯な取り組みや成長によるこびを与えられ、保育科教員としての醍醐味を味わってきた。

このように、特定研究は教員にとっても学生との意欲的なかわりを通して、感動を与えられ、自身を高めることが出来る貴重な機会なのである。学生が自ら伸びようとする意思や個々の活動を尊重しながら学問の心理や芸術の美の世界へ導いて行く。その過程での、人間的なふれあいを通じた教育的な環境づくりこそが、教員の責務ではないか。学生が自身の経験を通して、幼児期の「環境による教育」の真の意味を理解する絶好の機会であるに違いないのである。

さて、学生や教員からのゼミの復活を望む声も、短大の宿命として一年でも間を空けてしまうと学生から学生への継承は難しい。やはり教員側の意識や姿勢の問題である。

しかし、現状では、「保育総合ゼミ」のように単位化されれば、両者にとって負担であることは間違いない。あ

くまでも単位に縛られることなく、目的意識や勉強意欲が高く、努力家の学生が、自ら指導者を求め師事し、得意分野や興味のある分野での実力養成、未知の可能性への気づきと成長をねがって、教員のもとに集う。教員はあるがままの学生をしっかりと受け止め、互いに切磋琢磨しながら学生の幅広い分野での実力や可能性を開花させることができる機会を大事に育てたい。そんな学生との大学らしい交流「特定研究」の復活を願うものである。

その最初の一歩として、教員同士の率直な意見交換を行っていききたい。

VII 終わりに

特定研究は、まず始めに師ありきであるといえる。学生が求め、指導教員に師事して研究が始められる。開学以来、専任教員が使命感に燃え一丸となってあたっているが、そのほかにも実に多くの非常勤講師の方々、兼任の他科や四大の先生方にご理解や協力をお願いし、学生の指導をいただいた。

ここに、特定研究に関わりご指導をいただいた先生方を、感謝の念をもって紹介させていただく。すでに故人となられた先生方のお名前前に追慕の念を禁じえない。

創設時の3年間

小川弘貫、上田祖峯、稲垣清二郎、岡部禅竜、野崎信洋、浜本昭、石渡義一、湯本信夫、賀来琢磨、中野彰、山内昭道、長尾章象、天野珠子、阿久津絹江、藤田妙子、太田久紀、古野雅子、玉水俊哲、葛西公子、浅野常七、徳永寅雄

昭和44年度以降

村上直、中崎修男、重田恒雄、末光義史、中溝昭平、池田弘、篠原英寿、東隆真、安田淳子、森律子、小林清子、河尻政子、見理文周

昭和50年度以降

宮原誠一、平山康允、磯塚一誠、藤田（多久島）ちとせ、滝静寿、原俊子、福川須美、納原善雄、塚原晴美、神山順一、佐藤玲、加賀谷清隆、松山元、高木庸一、菅原順一

昭和60年度以降

田近陽子、賀島啓子

平成元年度以降（稲城キャンパス移転～12年度まで）

塚田美和子、佐藤由紀子、尾崎容子、宮崎恵、高玉和子、鹿野成子、須田和裕、光田督良、村山信彦、近藤伊津子、西川もも子、古川麒一郎、

木下茂昭、田中正浩
(順不同、敬称略)

参考引用文献

- 1) 駒沢女子短期大学『保育研究』第1号—第3号(昭和42—44年3月発刊)、第4号—第17号(昭和55年—平成年6月3月発刊)、第24号(平成13年3月発刊)
- 2) 『駒沢学園六十周年史』昭和62年10月発行
- 3) 駒沢学園校友会誌 平成2年度『無憂華』第28号 平成3年3月発刊
- 4) 駒沢女子短期大学『保育総合ゼミ論集』第6号(平成19年3月発刊)、第10号(平成3年3月発刊)
「論集の発刊に寄せて」

